1 今昔物語集

a 指示語
「わりなし・さらに・来し方」／動詞の活用

P.4

本文分析

男が
見れ（マ上一・已／接助）ば、薄色（名）の衣（格助・名）のなよよかなる（形動ナリ・体）に（格助）、濃き単（形ク・体／名）、紅（名）の袴（格助・名）長やかにて（形動ナリ・用／接助）、口覆（名）ひして（サ変・用／接助）
見ると、薄紫色の衣で柔らかい衣に、濃い紫色の単、紅の袴を長やかにはいて、口覆いをして

わりなく（形ク・用）、心苦しげなる（形動ナリ・体）目見（名）に（断・用／接助）て、女（名）る（ワ上一・用／存・終）たり。
はなはだしく痛々しい目つきで、女が座っている。

うち眺め（マ下二・用）たる（存・体）気色（名）も（係助）あはれげなり（形動ナリ・終）。
ぼんやり物思いに沈んでいる様子も悲しげである。

女は
我（代名）にも（断・用／係助）あらず（ラ変・未／消・用）、人（名）の（格助）落とし置き（カ四・用）たる（完・体）気色（名）にて（断・用／接助）、橋（名）の（格助）高欄（名）に（格助）押しかかり（ラ四・用）て（接助）ゐ（ワ上一・用／存・体）たるが（接助）、
ぼうぜんとして、人が落としていった様子で、橋の高欄に寄りかかっていると、

人（名）を（格助）見（マ上一・用）て（接助）、恥づかしげなるものから（形動ナリ・体／接助）、うれしと（形シク・終／格助）思ふ（ハ四・已／存・体）る（名）様なり（断・終）。男（名）これ（代名）を（格助）見（マ上一・体）るに（接助）、
人を見て、恥ずかしそうであるけれども、うれしいと思っている様子である。男はこれ（＝女）を見ると、

さらに（副）来し方（名）行く末（名）も（係助）覚えず（ヤ下二・未／消・用）、「かき載せて（サ下二・用／接助）行きなばや（カ四・用／強・未／終助）」と（格助）、落ちかかりぬべく（ラ四・用／強・終／推・用）あ（形動ナリ・
まったく前後の見境がつかなくなり、「ぜひ抱いて載せて行きたい」と、（女の）上に落ちてしまいそうに

はれに（用）思へども（ハ四・已／接助）、「ここに（代名／格助）かかる（連体）者（名）の（格助）あるべきやうなければ（ラ変・体／当・体／名／形ク・已／接助）、これ（代名）は鬼（係助／名）なめり（断・体・撥／定・終）」
いとしく思うが、「ここにこのような者（＝女）がいるはずの理由はないから、これ（＝女）は鬼であるようだ」

とて（格助）、「過ぎなむ（カ上二・用／強・未／意・終）」（格助）とひとくに（副）思ひなして（サ四・用／接助）、目（名）を（格助）塞ぎて（ガ四・用／接助）走り打ちて（タ四・用／接助）通るを（ラ四・体／接助）、この（代名／格助）
と思って、「（早く）通り過ぎよう」とひたすら心に決めて、目をふさいで（馬に）鞭打って走って通ると、この

女（名）、「や（感）、あの（代名／格助）主（名）。
女は、「あれ、あのお方。

などかいと（副／副）情けなくては（形ク・用／接助／係助）過ぎ給ふ（ガ上二・用／尊補・体）。
どうしてとても非情に通り過ぎなさるのか。

あさましく（形シク・用）思ひがけぬ（カ下二・未／消・体）所（名）に（格助）
あきれたことに思いがけない所に

人（名）の（格助）拾て行き（カ四・用）たる（完・体）なり（断・終）。人里（名）まで（副助）ゐ（ワ上一・用）て（接助）おはせ（サ変・命）」と（格助）言ふ（ハ四・体）を（格助）も（係助）男は 聞き果て（タ下二・未）ず（消・用）、頭（名）身（名）の（格助）毛（名）
人が（髪を）拾って行ってしまったのである。人里まで連れて行ってください」と言うのをも最後まで聞かず、髪の毛も身の毛も

太るやうに（ラ四・体／比・用）覚えけれ（ヤ下二・用／過・已）ば（接助）、馬（名）を（格助）かき早めて（マ下二・用／接助）飛ぶ（バ四・体）がごとくに（格助／比・用）行く（カ四・体）を（接助）、この（代名／格助）女（名）、「あな（感）情（形ク・
（恐怖で）太るように感じられたので、馬を早めて飛ぶように行くと、この女が、「ああ薄情

けなし」と（語幹／格助）言ふ（ハ四・体）声（名）、地（名）を（格助）響かすばかりなり（サ四・体／副助／断・終）。女が立ち走りて（ラ四・用／接助）来（カ変・用）たれば（完・已／接助）、男は「さればよ（ラ変・已／接助／間助）」と（格助）思（ハ四・
だなあ」と言う声は、地を響かすほどである。（女は）立ち上がり走って（通って）来たので、（男は）「やはり思ったとおりだ」と思っ

ふに（体／接助）、「観音（名）、助け給へ（カ下二・用／尊補・命）」と（格助）念じて（サ変・用／接助）、あさましく（形シク・用）とき（形ク・体）馬（名）を（格助）、鞭（名）を（格助）打ちて（タ四・用／接助）馳すれば（サ下二・已／接助）、
て、「観音、お助けください」と祈って、驚くほど速い馬を、鞭を打って走らせると、

鬼（名）は走りかかりて（ラ四・用／接助）、馬（名）の（格助）尻（名）に（格助）手（名）をうち掛け（カ下二・用）うち掛け（カ下二・用）引かふるに（ハ下二・体／接助）、油（名）を（格助）塗りたれば（ラ四・用／存・已／接助）、
鬼は走ってつかみかかって、馬の尻に何度も手をかけ引っ張るが、油を塗ってあるので、

引き外し（サ四・用）引き外し（サ四・用）て（接助）、え（副）捕へず（ハ下二・未／消・終）。
引き外し引き外しして、捕らえることができない。

構造図

橋で女に出会う
↓
鬼だと判断して通り過ぎる
↓
鬼になって追って来た女からなんとか逃れる

言葉・表現

2 **わりなし**→語彙問題訳例 a
2 **うち眺む**（マ下二）……物思いに沈む。
2 **気色**（名）……①様子。②機嫌。③意向。
5 **さらに**→語彙問題訳例 b
5 **来し方**→語彙問題訳例 c
6 **やう**（名）……①様子。②理由。わけ。③方法。
8 **などか**（副）……どうして。
8 **あさまし**（形シク）……驚くべきことだ。あきれたことだ。

a 指示語

指示語には、「これ」「そこ」などの指示代名詞と、「さ」「かく」などの指示の副詞がある。指示語はすぐ前に記された内容を指すことが多いが、離れたものを指し示すこともあるので、要注意である。指示語の指示内容をつかむには、前後の内容と一緒に考えることも大切である。（→**問二・問五**）たとえば、二重傍線部Aの場合は、「これ」が何を指すかを考えるよりも、男が何を見て、心を奪われたのかを考えるほうが効果的である。

設問解説

問一　(ア)　**語句**　各2点

アとオは、ワ行上一段活用動詞「ゐる」の連用形。「ゐる」には、「居る」（＝座る・いる）と「率る」（＝連れる）とがある。アは「居る」で、オは「率る」である。カはカ行変格活用動詞「来（く）」。下の「たれ」は連用形接続の助動詞「たり」の已然形なので、カは連用形で「き（たれ）」と読む。

(イ)　**文法**　各1点

イは、下に「ず」が付いて「覚えず」と工段の音が現れているので、下二段活用。ヤ行の動詞（終止形は「覚ゆ」）であることにも注意しよう。ウは、ラ行変格活用動詞「あり」の連体形。エは、下に「ず」を付けると、「過ぎず」とイ段の音が現れるので、上二段活用。キは、サ行変格活用動詞「念ず」の連用形。「ザ行」と答えないように注意しよう。

問二　**部分内容**　3点

Aは、男が橋で見た「女」を指す。Bの「かかる」は、「このような」の意の連体詞。男が「ここにこのような者がいるはずの理由はない」と思った対象は、橋にいた「女」である。Cは、女を見て恋情を感じながらも、

978-4-342-35095-5（16.08）

「これは鬼であるようだ」と推定している文脈から、「女」を指すと判断。Dの「主」は、他人の敬称で「お方・お人」の意。女が「あれ、あのお方……」と呼びかけた相手は「男」である。Eは、橋にいた「女」を指す。

問三　部分内容　4点

本文中の表現で、恐怖と関係があるのは、7行目の「目を塞ぎて」と、9～10行目の「頭身の毛太るやうに覚えければ」。このうち後者は、現代語の「身の毛がよだつ・総毛立つ」にあたる表現で、恐怖のために全身の毛が逆立つさまを表しているので、これを抜き出す。

問四　語句　各4点

1の「あな」は「ああ・なんと」の意の感動詞。「情けな」は形容詞「情けなし」（ク活用）の語幹で、「薄情だなあ」の意。3の「え」は打消表現と呼応して、「～でき(ない)」の意を表す副詞。「ず」は打消の助動詞である。

問五　全体内容　5点

「さればよ」は、ラ変動詞「さり」の已然形に接続助詞「ば」と間投助詞「よ」のついた形で、予想などが的中して「やはり思ったとおりだ」という気持ちを表す。ここは本文6行目の「これは鬼なんめり」という推測が的中して、「やはり思ったとおり鬼だった」という気持ちを表している。

語彙問題訳例　各4点

a **わりなし**（形ク）①道理に合わない。②無理だ。③はなはだしい。
b **さらに**（副）①ますます。②まったく。
c **来し方**（名）①通ってきた方向。②過去。
＊「来し方行く末も覚えず」は、「過去も未来もわからない状態・前後の見境がつかない状態」を表す。

文法問題解説　各2点

(1)の「往に」はナ行変格活用で「な／に／ぬ／ぬる／ぬれ／ね」と活用する。(2)の「着る」はカ行上一段活用。体言（名詞）「物」にかかっているので、連体形である。(3)の「暮るる」は、「ず」を付けると「暮れず」とエ段の音が現れるので、ラ行下二段活用。「れ／れ／る／るる／るれ／れよ」と活用する。(4)の「思ひ」は、「ず」を付けると「思はず」とア段の音が現れるので、ハ行四段活用。「は／ひ／ふ／ふ／へ／へ」と活用する。

解答と採点基準

問一　(ア)ア　居　オ　率　カ　き
(イ)イ　ヤ（行）下二段（活用）　ウ　ラ（行）変格（活用）
エ　ガ（行）上二段（活用）　キ　サ（行）変格（活用）

問二　D

問三　頭身の毛太るやうに覚えければ（14字）
基準　「頭身の毛太るやうに覚えけれ」でも可。

問四　1　ああ薄情だなあ　3　捕らえることができない

問五　やはり思ったとおり鬼だった（13字）

本文要約　1　様子　2　見　3　女　4　載せ　5　鬼　6　声

語彙問題　a　はなはだしい　b　まったく　c　過去

文法問題　(1)ナ（行）変格（活用）・連用（形）
(2)カ（行）上一段（活用）・連体（形）
(3)ラ（行）下二段（活用）・連体（形）
(4)ハ（行）四段（活用）・連用（形）

学習コーチ

□語幹と語尾の区別のない動詞

語幹と語尾の区別を持たない動詞には、次の語がある。
①上一段活用動詞「着る」「似る」「見る」「居る」「率る」など。
②下一段活用動詞「蹴る」
③下二段活用動詞「得」「経」「寝」
④カ行変格活用動詞「来」
⑤サ行変格活用動詞「す」
これらの動詞には、一文字の活用形があり、助動詞などと混同しやすいので、気をつけよう。「得」「経」「寝」「来」は、文中での読みを問われることがあるので、特に要注意である。

□サ行変格活用の複合動詞

サ変動詞は「す」「おはす」の二語だが、このうち「す」は多様な複合動詞を作るので、要注意である。**問一**(イ)で扱った「念ず」は、名詞「念」＋サ変「す」からできた動詞。同じように、名詞＋「す」から作られた動詞には、「愛す」「死す」「信ず」「御覧ず」などがある。語尾がザ行のものも、活用の分類としては「サ変動詞」に属することにも注意を払おう。

□冷静さを失った状態を示す表現

「我にもあらず」（3行目）
……自分でわからない上の空の状態や、茫然とした状態を表す。類似表現に、「我か人か」「我か」（＝自分か他人かわからないほど心が乱れているさま・茫然自失の様子）がある。

「来し方行く末も覚えず」（5行目）
……過去（来し方）も未来（行く末）もわからない状態、前後の判断がつかない状態、を表す。

本文を読む

▼テーマ……ある男が橋で鬼に出会い、追われる話。女を見た時から必死に逃げるまでの、男の心理の移り変わりを読み取ることが、読解のポイントとなる。

▼心理の過程……男の心理は、①女の美しい姿に恋情をおこし、連れて行きたく思う。→②橋に女がいるわけはないので、鬼だろうと判断する。→③連れて行けという女の声を聞き、恐怖を感じる。→女に追われ、やはり鬼だったと思って観音の守護を願う、というふうに展開する。心理・心情を表す表現を、一つ一つ正確に押さえよう。

▼結末……男は、うまく鬼から逃げることができたが、家に戻ってから悲劇的な出来事が起きる。興味があれば原文を読んでみよう。

100字要約

ある男が橋で美しい女に出会った。男は女を連れて行きたいと思ったが、橋に女がいることは不審で、鬼だろうと推測し、通り過ぎる。鬼は男を追って来るが、男は馬の尻に前もって油を塗っておいたので、つかまらない。（100字）

出典　『今昔物語集』巻二十七の十三「近江国の安義の橋の鬼、人を食らふ事」

『今昔物語集』は、平安時代後期の説話集。十二世紀前半の成立と推定されている。編者は未詳。全三十一巻（現存するのは二十八巻）。本朝（日本）・震旦（中国）・天竺（インド）を舞台とする一千余りの説話を、仏法部と世俗部に分けて収める。本話は、本朝世俗部に収められている。本文は「日本古典文学全集」によった。

2 蜻蛉日記（かげろうにっき）

本文分析

閏二月の一日の日、雨のどかなり。それより後、天晴れたり。三日、方あきぬ
（閏二月の一日の日、雨がおだやかである。それより後、空が晴れた。三日、方角があいた）

と思ふを、音なし。四日もさて暮れぬるを、あやしと思ふ思ふ、寝て聞けば、夜
（と思うのに、（夫からの）便りがない。四日もそうして暮れてしまったので、変だと思いながら、寝て聞くと、）

中ばかりに火の騒ぎする所あり。近しと聞けど、もの憂くて、起きも上がられぬ
（中頃に火事騒ぎをする家がある。近いと聞くが、おっくうで、起き上がれないでいる）

を、これかれ訪ふべき人、徒歩からあるまじきもあり。それにぞ起きて、出でて、
（と、あれこれ見舞いに来るはずの人が、徒歩では来るはずのない（身分の高い）人も来訪する。それによって起きて、出て、）

答へなどして、「火しめりぬめり」とて、あかれぬれば、入りてうち臥す程に、
（応対などをして、（人々が）「鎮火したようだ」と言って、それぞれ帰っていったので、部屋に入って横になるうちに、）

先追ふ者、門に止まる心地す。あやしと聞く程に、「おはします」と言ふ。灯火の
（先払いの者が、門に止まる感じがする。変だと聞くうちに、「（殿が）いらっしゃる」と言う。灯火が）

消えて、はひ入るに暗ければ、「あな暗。ありつるものを頼まれたりけるにこそあ
（消えて、入るのに暗いので、「ああ暗いことよ。さっきのものを（明かりとして）頼っていらっしゃったのであっ）

りけれ。近き心地のしつればなむ。今は帰りなむかし」と言ふ言ふ、うち臥して、
（た。（火事が）近い感じがしたので（来た）。今は（鎮火したので）帰ってしまおうよ」と言いながら、（夫は）横になって、）

宵より参り来まほしうてありつるを、男どもも、皆まかり出にければ、えもの
（「宵から参上したかったのだが、従者たちも、みな退出してしまったので、来ることができ）

せで。『昔ならましかば、馬にはひ乗りてもものしなまし。なでふ身にかあらむ。
（なくて。『昔だったら、馬に乗ってでも行くだろうに。なんという（窮屈な）身だろうか。）

何ばかりのことあらば、かくて来なむ』など思ひつつ、寝にけるを、かうののし
（どれほどの大事があれば、こうして来るのだろう』などと思いながら、寝てしまったところ、このように大騒ぎ）

りつれば、いとをかし。あやしうこそありつれ」など、心ざしありげにありけり。
（をしたので、（ここに来られて）とても面白い。不思議だった」などと、愛情がありそうに言った。）

明けぬれば「車など異様ならむ」とて、急ぎ帰られぬ。六、七日、物忌と聞く。
（夜が）明けたので、「（急いで来たので）牛車などが見苦しいだろう」と言って、急いでお帰りになってしまった。六日、七日は、物忌と聞く。）

八日、雨降る。夜は、石の上の苔、苦しげに聞こえたり。
（八日、雨が降る。夜は、石の上の苔が、苦しそうに聞こえた。）

構造図

夫の訪れを待っている
←
近所で火事騒ぎがある
←
火事のおかげで夫は作者の家に来られた
←
翌朝夫は帰って行った

言葉・表現

2 **音**（名）……①音。②声。③噂。④贈り物。
2 **あやし**（形シク）……①不思議だ。変だ。②粗末だ。③卑しい。
6 **心地**→語彙問題訳例a
7 **頼む**（マ四）……頼る。あてにする。
10 **なでふ**→語彙問題訳例b
11 **ののしる**→語彙問題訳例c
12 **心ざし**（名）……①意志。②愛情。③

a 主体の把握

「心地・なでふ・ののしる」／形容詞・形容動詞

→ P.6

a 主体の把握

古文では主語を省くことが多いので、常に「だれが・何が」という内容を補いながら読む習慣を身につけてほしい。日記や随筆では、作者が行為の主体であることも多いので、要注意である。主体判定問題を解く場合は、傍線部の述語だけでなく、前後の内容とつなげて考えるとよい。（→問三）二重傍線部Aの場合は、直前の内容とつなげて、「あやしと思ふ思ふ、寝て聞」いたのはだれか、というふうに考えるのである。

設問解説

問一　文法　各2点

形容詞・形容動詞の活用形は、それぞれの活用表に当てはめて判断する。アは、形容詞「暗し」（ク活用）の已然形。イは、形容詞「近し」（ク活用）の連体形。ウは、形容動詞「異様なり」（ナリ活用）の未然形。エは、形容動詞「苦しげなり」（ナリ活用）の連用形である。

問二　文法　3点

活用語のうち変化しない部分を「語幹」と呼び、変化する部分を「語尾（活用語尾）」と呼ぶ。本文中に用いられている形容詞の語幹は、「暗」（7行目）。ク活用の形容詞「暗し」の語幹である。

問三　部分内容　3点

本文6行目の「おはします」が、作者の夫(兼家)の来訪を告げる言葉であるから、二重傍線部A～Cは、夫の来訪以前、Dは、来訪以後の部分に属することになる。Aは、「夫から音信がないことを、変だと思いながら寝て聞いていた」という文脈から、作者の行為。Bは、「火事見舞いの人々がやって来てから、起きて、出て、応対して」いるので、やはり作者の行為。Cは、「先払いの者の止まる音を聞いて変だと聞いている」ので、これも作者の行為である。Dは、「部屋に入って、ああ暗いなどと言いながら横になった」という文脈から、夫兼家の行為と判断する。

問四　部分内容　6点

「徒歩から」は「徒歩で」の意。「まじき」は打消推量の助動詞「まじ」の連体形で、ここでは「徒歩では来るはずがない」(打消当然)の意を表している。当時、身分の高い人々が外出する際は、牛車に乗るのが普通であった。したがって、「徒歩では来るはずのない人」=「身分の高い人」ということになる。

問五　部分内容　4点

「ありつる」は「さっきの」の意の連体詞。傍線部の直後の「頼ま」は「頼る」の意である。暗い中で「さっきのものを頼っていらっしゃった」という文脈から、「火の騒ぎ」(3行目)を抜き出す。

問六　語句　6点

「なら」は、断定の助動詞「なり」の未然形。「……ましかば、……まし」は「……だったら、……だろうに」という反実仮想を表している。「ものし」はここでは「行く」の意。「な」は助動詞「ぬ」の未然形で強意を表している。

語彙問題訳例　各4点

a **心地**(名)①気持ち。　②感じ。気配。　③病気。
b **なでふ**(連体)なんという。どんな。
c **ののしる**(ラ四)①大騒ぎをする。　②盛んに評判になる。

文法問題解説　各2点

(1)の「心う」は、「つらい・ひどい・いやだ」などの意を表す形容詞「心うし」(ク活用)の語幹。感動詞「あな」と合わせて「ああひどいなあ」という感動表現となっている。(2)の「にく」は、「しゃくにさわる・にくらしい」などの意を表す形容詞「にくし」の語幹。下に格助詞「の」を伴って、体言(名詞)「男」を修飾する連体修飾語となっている。(3)の「異様」は、「変だ・普通でない」の意を表す形容動詞「異様なり」の語幹。これも格助詞「の」を伴って、体言(名詞)「こと」を修飾する連体修飾語となっている。(4)の「浅」は、形容詞「浅し」(ク活用)の語幹。接尾語「み」が付いて「浅いので」の意を表している。

解答と採点基準

問一　ア　已然(形)　イ　連体(形)　ウ　未然(形)　エ　連用(形)
問二　暗　**問三**　D
問四　徒歩では来るはずのない身分の高い人。(18字)
問五　火の騒ぎ(4字)
問六　昔だったら、馬に乗ってでも行くだろうに(19字)
本文要約　1　変だ　2　火事騒ぎ　3　愛情　4　宵　5　物忌
語彙問題　a　感じ　b　なんという　c　大騒ぎをする
文法問題　(1)　ああひどいなあ　(2)　ああにくらしい男だなあ　(3)　とても変なこと　(4)　水が浅いので

学習コーチ

□**形容詞型・形容動詞型の活用をする助動詞**

助動詞の中には、形容詞・形容動詞と同様の活用をするものがあるので、形容詞・形容動詞の活用を正確に暗記しておこう。

○ク活用型……「べし」「たし」「ごとし」
○シク活用型……「まじ」「まほし」
○ナリ活用型……「なり」(断定の助動詞)
○タリ活用型……「たり」(断定の助動詞)
＊「じ」「らし」は無変化型、「まし」は特殊型なので、形容詞型と混同しないこと。

□**形容詞・形容動詞の意味**

形容詞・形容動詞は、事物の性質・状態を示す言葉なので、文章の内容を理解するうえで、重要な手がかりを提供してくれる。したがって、活用だけでなく、個々の語がどういう意味を表すのかを、一つ一つ地道にマスターしていくことが必要となる。本文に用いられた形容詞・形容動詞のうち、特に注意を要する語に解説を加えておこう。

「あやし」(2・6・12行目)
……①不思議だ・変だ、②粗末だ、③卑しい、などの意を表す。本文では、すべて①の意で用いられている。

「をかし」(12行目)
……①趣がある、②興味深い・面白い、③美しい、④すぐれている、などの意を表す。本文では、都合のよい時に火事騒ぎになったことについて「面白い」と思う気持ちを表している。

「異様なり」(13行目)
……「変だ・普通でない」の意を表す。本文では、あわてて乗って来た牛車の様子を、「見苦しくて変」だろうといっている。

100字要約

夜、夫の訪れがないのを変だと思いながら寝ていると、近所で火事騒ぎがある。火事見舞いの人々が帰った後、夫が訪ねて来て、作者に火事のおかげでかえって作者の家に来ることができたなどと話し、翌朝帰って行った。　(100字)

本文を読む

▼**場面**……前半(5行目「入りてうち臥す程に、」まで)は、火事騒ぎになって、作者が見舞い客に応対する様子。後半は、夫が訪ねて来てあれこれ作者に話しかける様子を記す。

▼**夫の会話**……夫の会話は二つの会話から成り立っている。一つ目は、部屋が真っ暗なのは、火事の明かりに頼っていたのだなという冗談から始まっている。平安貴族はこのような軽妙な会話を好むので、要注意である。二つ目の会話は、宵のうちから来たかったのだが、窮屈な身分で来られなかった。火事騒ぎのおかげで来られてよかったということを言っている。夫の訪れを待っていた作者にとって、「心ざし(=愛情)」の感じられる会話であるといえよう。

出典　『蜻蛉日記』下巻・天禄三年閏二月

『蜻蛉日記』は、平安時代前期の日記。作者は藤原道綱母(九三六?～九九五?)。成立は九七四(天延二)年以降と考えられるが、未詳。三巻から成り、藤原兼家と結婚した作者が、夫の多情のために苦悩し、やがて夫の愛をあきらめ、わが子道綱への愛に活路を見いだそうとする、二十一年間にわたる内面の記録である。本文は「新編日本古典文学全集」によった。

1 搜神記（そうしんき）

本文分析

❶ 予章新喩県男子（予章新喩県の男子田中に六七女有るを見る。）見田中有六七女。皆毛衣を衣る。

❷ 衣毛衣。不知是鳥。（是れ鳥なるを知らず。）

❸ 女一女所解毛衣、取蔵之。（一女の解く所の毛衣を得、取りて之を蔵す。）

❹ 即往就諸鳥。（即ち往きて諸鳥に就く。）

❺ 諸鳥各飛去、一鳥独不得去。（諸鳥各飛びて去るも、一鳥独り去るを得ず。）

❻ 男子取而飛去。（男子取りて使役（AにBさせる）（AヲシテB［セ］しむ）而飛去。）

❼ 以為婦生三女。（以て婦と為して三女を生む。）

❽ 其母後使女問父、知衣在積稲下、得之衣而飛去。（其の母後に女をして父に問はしめ、衣の在積稲下に在るを知り、之を得て衣て飛び去る。）

❾ 後復以迎三女、女亦得飛去。（後復た以て迎ふれば、女も亦飛び去るを得。）

構造図

予章……生三女。
予章新喩県に住む男は、鳥だと知らずに一人の女を捕まえ、妻にして三人の娘をもうけた

←

其母……而飛去。
母となった鳥は、自分の毛ごろものありかを知り、それを着て飛び去っていった

←

後復……得飛去。
その後、母は娘を迎えに戻ってきたので、娘たちも同様に飛び去っていった

本文要約

予章新喩県の男は、女の姿をした鳥を捕まえて妻とし、三人の娘をもうけたが、妻は自分の毛ごろものありかを知ると、それを着て飛び去っていった。やがて娘たちも、迎えにきた母とともに去っていった。

a 修飾語の把握

「復・亦」／使役形

→ P.38

口語訳

❶予章新喩県の男が（あるとき）畑の中に六、七人の女がいるのを見かけた。❷（女たちは）みな毛ごろもを着ていた。❸（男は）これ（＝この女たち）が鳥であることに気づかなかった。❹（男は）腹ばいになって行きその（＝女たちの）中の一人が脱いだ毛ごろもを手に入れ、取ってそれを隠してしまった。❺そしてすぐさま歩いていって（女の姿をしている）鳥たちのもとへと近づいた。❻鳥たちはそれぞれ飛び去っていったが、一羽の鳥だけが飛び去ることができなかった。❼男は（その女を）めとって妻とし三人の娘をもうけた。❽その（＝娘たちの）母はその後娘たち**に**父親に（毛ごろものありかを）尋ね**させ**、（その結果毛ごろもが）積んだ稲わらの下にあることを知り、これを手に入れて身につけると（そのまま）飛び去っていった。❾その後再び（娘たちの母は）三人の娘たちを迎えにやってきたので、娘たちもやはり飛び去ることができたのであった。

語と表現

☆ 就
読 つく
意 1行く・向かう
2対する・面と向かう
3（仕事などに）つく

☆〔不可能を示す表現〕
不レ得ニ―一（―［する］ヲ）
読 ―［する］を得ず
意 ―できない。

設問解説

a 修飾語の把握

漢文では、修飾を表す場合、原則として「修飾語―被修飾語」という構造をとる。修飾語としては、日本語の副詞や形容詞、形容動詞に当たる語が用いられるのはもちろんだが、通常は動詞や名詞として扱われる語も修飾語としての働きをもつことがある（→**問一**）。したがって、特に動詞が連続している場合には、動作の連続を表しているものなのか、修飾関係にあるのかに注意しなければならない。

問一 口語訳　4点

「所」は直後に用言を伴って体言化する働きをもつ。またさらにその下に体言を伴うと連体修飾を形成する。

所レ A（スル）　読 A［する］所　意 Aするもの・こと
所レ A（スル）B　読 A［する］所のB　意 AするB

問二 内容　4点

ここまでの文脈を正確にとらえよう。

男が女たちを見かけた。
←
男は女たちのもとへ行き、一女の毛ごろもを手に入れた。
←
鳥たちは飛び去った。

ここの「女たち」とはとりもなおさず「鳥」のことであり、「一鳥」は男に毛ごろもを取られてしまったために飛び去れなかったのである。

問三 内容　5点

「以為婦」とあるが、これは「其一女」は「女たちの中の一人」などと訳せばよい。また「解」は「衣」についてなのだから「脱ぐ」と訳出したい。

以テ（もつテ）A ヲ 為（なス）B ト	読　Aを以てBと為す
	意　AをBとする・見なす・思う。

のA部分が省略されたものである。ここでは「(逃げられなかった)女」が省略されている。

問四　口語訳　5点

「女」が残されていた娘たちを指していることに注意する。また「得」は動詞の「去」から返ってきているので可能を表していることに注意する。

問五　内容　6点

アは下からかかっているので、動詞として用いられている。ここでは「衣る」と読み、「(衣服などを)着る」という意味。イはアの動詞にかかる目的語となっており、「毛衣」で「毛ごろも・毛皮」という意味。「衣」に「ヲ」を送る。ウは続く「在」以降に対する主語となっており、名詞である。つまりイの「毛衣」と同じ意味だと判断すればよい。ここでは「衣」に「ノ」を送る。エは直前に「得」之(ヲ)(これを手に入れて)」とあり、また直後の「而」の下に「飛去(ビル)」とあるので、動詞の「着る」だと判断する。「而」は通常接続を表し、直前にある字が用言なら「―(ズ)テ 而」と、「連用形＋テ」にする必要があるので、ここでは「衣て」と読む。

問六　要旨　6点

①は竹から生まれたかぐや姫が月に戻っていくという話。

③は天の川に隔てられ、会えないでいる織姫と彦星が、一年に一度だけ七月七日に会えるという話。

④は亀を助けた浦島太郎が竜宮城に案内され、戻ってみると長い年月がたっており、玉手箱を開けた浦島は瞬く間に年を取ってしまったという話。

正解の②は「三保の松原」の話とも称されることがある。

語彙問題解説　各2点

a「復」は行為等が繰り返されるのを表すときに用いられる。

b「亦」は二つのものが同じような状態であったり、同様の行為をしたりするとき、また同方向になっているのを表すときに用いられる。

句形問題解説　問一　各3点／問二　各5点

問一　(1)助動詞「使」と動詞「問」にはさまれた「女」に「ヲシテ」を送る。また「問」にかかる「父」の送り仮名は「ニ」となる。(2)「人」が行為をさせる対象なので「ヲシテ」を送る。

問二　(1)ここの「女」は本文で「むすめ」と読まれていることに注意する。(2)「哭」は声を上げて泣くことで、人が死んだ場合や死者を悼む際など多く葬礼のときに行われる。

解答と採点基準

問一　女たちの中の一人が脱いだ毛ごろもを　**問二**　②

問三　女をめとって妻とした。

基準　「女」は「逃げられなかった女」「一羽の鳥」なども可。

問四　娘たちもやはり飛び去ることができた。

問五　エ　**問六**　②

本文要約

1　六七　2　鳥　3　婦　4　三

5　女　6　衣　7　母

語彙問題

a　再び〔もう一度〕　b　やはり〔同様に〕

句形問題

問一　(1)　女をして父に問はしむ。

(2)　人をして哭する者に問はしむ。

問二　(1)　娘(たち)に父親に(毛ごろものありかを)尋ねさせた。

(2)　人に〔人をやって〕声を上げて泣いている者に尋ねさせた

学習コーチ　修飾語の把握のポイント

修飾語＋被修飾語

通常、修飾語は被修飾語の直前に置かれる。

さまざまな語が修飾語として用いられる

修飾語としては、日本語の副詞、形容詞、形容動詞が用いられるのはもちろんだが、動詞や名詞に相当する語も修飾語として用いられることがある。特に動詞が続いている場合には、行為・動作の連続を表す場合と、修飾関係にある場合とがあるので注意しよう。

使役形のポイント

使（シム）　A（ヲシテ）　B（セ）

※「使」は書き下し文では平仮名書きにする。

※「使」以外にも「**令・教・遣**」などが使役の助動詞として用いられる。

※行為をさせる対象に「ヲシテ」の送り仮名をつける。

※「使（シム）」を用いる使役形以外にも「**命**（めいジテ）―（セ）シム」「**遣**（つかハシテ）―（セ）シム」など、使役を導く語による使役形がある。また文脈から使役の「シム」をつけることもある。

本文を読む　鳥を女性と見間違えた男

本文は、日本に伝わる「羽衣伝説」を思い出させる。本文で「田中」「鳥」となっているものが、羽衣の話では「三保の松原」「天女」となっている点は、いかにも中国と日本の感覚の差が現れているようで興味深い。

さて、文中に登場する男の目に「女」と映っていたものは、実は「鳥」であったということなのだが、このあたり、じっくり考え始めると、不可解極まりないものがある。男には「女」に見えていたが、ほかの人々には「鳥」だとわかっていたのであろうか。それともみなが「女」だと思っていたのだが、最後に「鳥」だったと理解したというのであろうか。

出典の『搜神記』は、不可思議な話を集めた書として世に伝わっているが、案外、その映り方の奇妙さも、この話が『搜神記』にとられた理由の一つかもしれない。

出典　『搜神記（そうしんき）』　巻十四

東晋（とうしん）の干宝（かんぽう）の著。干宝が伝聞した不思議な話や伝説を収録してある。幽霊、妖怪、怪異な話などを集めたものを、一般に「志怪（しかい）小説」というが、『搜神記』は、その「志怪小説」の代表的な作品である。

2 澠水燕談録

本文分析

❶ 曹州の于令儀なる者は、市井人也。❷ 長厚にして（于令儀）不レ竹レ物、晩年家頗豊富。❸ 一夕、盗入レ其家、物に竹らはず、晩年家頗る豊富なり。盗其の家に入り、

諸子撫レ之、乃隣舎子也。❹ 令儀曰、「汝素より諸子之を撫ふるに、乃ち隣舎の子なり。令儀曰はく、

寡悔、何苦而為レ盗邪。」（疑問）❺ 曰、「迫レ於貧耳。」❻ 問レ其寡悔なるに、何を苦しみて盗を為すや」と。曰はく、「貧に迫らるるのみ」と。（盗）

其所レ欲。❼ 曰、「得レ十千足レ以衣食。」❽ 如レ其欲レ其欲する所を問ふ。曰はく、「十千を得ば以て衣食するに足る」と。其の欲するがごとくなり。（盗）（于令儀）

☆ ❾ 与レ之。既去、復呼レ之、盗大恐。謂❿ 曰、「汝貧しきこと之に与ふ。既に去り、復た之を呼ぶに、盗大いに恐る。謂ひて曰はく、「汝貧しきこと（于令儀）

甚、夜負十千以帰、恐為人所詰。」⓫ 留レ之、甚だし、夜十千を負ひて以て帰らば、恐らくは人の詰むる所と為らん」と。之を留め、（于令儀）

至レ明使レ去。⓬ 盗大感愧、卒為レ良民。明に至りて去らしむ。盗大いに感愧し、卒に良民と為る。

構造図

曹州……乃隣舎子也。
于令儀の家に盗人が入り、捕らえてみると隣の者だった
←
令儀曰、……与レ之。
于令儀はその男の望みどおり、一万銭を与えた
←
既去、……使レ去。
立ち去りかけた男を、怪しまれるのではないかと危惧した于令儀は夜が明けてから帰らせた
←
盗大感愧、卒為レ良民。
于令儀の配慮に感動した男は、善良な人間となった

本文要約

温厚で知られる于令儀のもとに、隣家の者が、貧しさに堪えかねて盗みに入った。于令儀は男の望みどおりに金を与え、さらに怪しまれないように夜が明けるのを待ってから帰らせた。男は感動し、善良な人間となった。

口語訳

❶曹州の于令儀という人は、町中に住む庶民であった。❷温厚で慎み深く人といさかいを起こすこともなく、晩年には家はかなり裕福であった。❸ある晩、盗人が彼の家に押し入ったので、家の者たちがこれを捕まえてみると、なんと隣の家の者であった。❹于令儀が言った、「お前はふだん大きな過ちを犯したこともないのに、どうしてわざわざ盗みなどしでかしたのか」と。❺(盗人が)言った、「貧しさに追い立てられたのです」と。❻(于令儀は)彼の(＝盗人の)望みを聞いた。❼(盗人は)言った、「一万銭もあれば十分生活できます」と。❽(于令儀は)彼の(＝盗人の)望みどおりに金を与えた。❾(盗人が)立ち去りかけたところで、(于令儀は)再びこれ(＝盗人)を呼び戻すと、盗人はたいそう恐れた。❿(于令儀は盗人に対して)言った、「お前はとても貧乏なのだから、夜一万銭もの金を背負って帰ったなら、きっと人に責めとがめられるだろう」と。⓫(于令儀は)これ(＝盗人)をとどめて、夜が明けてから帰らせた。⓬盗人はひどく感激し、とうとう善良な人間になった。

設問解説

a 主語と述語の把握

漢文では述語とそれに対する主語を正確につかむことが重要である。漢文では、通常「主語＋述語＋目的語」という構造をとるので、基本的には主語は述語の直前に置かれている。だが、直前の文と主語が変わらないときや、人物関係から明らかな場合は、しばしば主語は省略されることがある。文脈から主語をしっかり読み取るようにしよう（→問三・問四・問五・問六）。

問一 言葉　3点

「市井」とは、「市場と井戸」という人の集まる場所のことで、通常「町」を表す。「市井人」とは、「町にいる人」のことだから、「町中に住む庶民」という意味になる。

問二 書き下し　3点

書き下し文では、古文の助詞や助動詞に当たる語、及び再読文字の二度目の読みは平仮名で書かなければならない。ここは「邪」が疑問・反語の

語と表現

☆ 苦而―［ス］
読 苦しみて―［す］
意 苦しんで―する。苦労して―する。わざわざ―する。

☆ 既A［シ］、復B［ス］
読 既にA［し］、復たB［す］
意 Aしてから、(また)Bする。Aしかけて、(また)Bする。

a 主語と述語の把握

「汝・素」／受身形

→ P.40

終助詞になっている。また置き字は書いてはいけないが、「而」が置き字であることにも注意する。

問三 口語訳　5点

「所」は

所ニ―[スル]　読　―[する]所　意　―するもの・こと

と用言を名詞にする働きをもつ語である。したがって傍線部を直訳すると、「その望むものを聞いた」となる。また3～5行目にかけて、

令儀曰、「汝素寡悔、…。」→（盗）曰、「迫ニ於貧一耳。」→
傍線部3　→（盗）曰、「得ニ十千一…。」

と、交互に主語が入れ替わっていることにも着目する。

問四 内容　5点

「既」は、完了を表すが、次のような働きもある。

既ニ　A、（復）　B[ス]　読　既にA[し]、（復た）B[す]
意　Aしてから、（また）Bする。
Aしかけて、（また）Bする。

ここは「既去」の主語が「盗人」であり、「復呼之」の主語が「于令儀」であることに注意する。また「之」は立ち去りかけた盗人を指している。

問五 指示・内容　各4点

(ア) 直前の会話文で、于令儀は「夜大金を持ち歩くと、ほかの人に怪しまれる」と言っている。そのうえで「留之」という行為に出たのだから、ここの主語は「于令儀」であり、「之」は「盗人」を指していることになる。

(イ) 直前の会話文が盗人に向けられたものであることと、直後の「盗大感愧」から、傍線部の主語は明らかに「盗人」ではない。

問六 要旨　6点

直前に「盗大感愧、（盗人はとても感動し恥じ入って、）」とあることから、傍線部の主語が「盗人」であることと、「感動し恥じ入った」ことが傍線部の理由だとわかる。正解は③。①④は本文にない内容。②は「村人たち」となっているのが誤り。

語彙問題解説　各2点

a 「若・爾」なども同じ用法の語である。

b ここでは「普段から」の意味で考えるとわかりやすい。

句形問題解説

問一 各3点／問二 各5点

問一 (1)「耳」はここでは断定的な用法になっている。

解答と採点基準

問一 町中に住む庶民

問二 何を苦しみて盗を為すや(と)。

問三 于令儀は盗人の望みを聞いた。

基準 「望み」は「望むもの・望むこと」も可。

問四 盗人が立ち去りかけたところで、于令儀は再び盗人を呼び戻した、ということ。

問五 (ア) ② (イ) ①　**問六** ③

本文要約

1 于令儀　2 晩年　3 隣舎子
4 十千　5 人　6 良民

語彙問題

a なんぢ〔じ〕　b もと

句形問題

問一 (1) 貧に迫らるる
(2) 人の・所と為らん

問二 (1) 貧乏に追い立てられたのです。
(2) 人に責めとがめられるだろう。

学習コーチ

主語と述語の把握のポイント

主語＋述語の形

※原則として 主語＋述語 という形になっている。

前の文の主語が受け継がれる

※前の文と主語が変わらない場合は、主語は省略されるのが普通である。

文脈に注意

※二者が交互に行為を行っている場合などは、文脈から明らかに主語がわかるので、主語は省略されることがある。

受身形のポイント

B ニ 於 A ニ　読 AにB[せ]らる・る　意 AにBされる。

※「於」以外に「于・乎」も用いられる。

※「B」が四段動詞の場合は「る」、それ以外の場合は「らる」に接続する。

為ニ A ノ 所ニ B[スル]　読 AのB[する]所と為る　意 AにBされる。

本文を読む

徳のある人の条件

「君子」「大人」「長者」などの表現は、しばしば徳の高い人格者に対して、尊敬の念を込めて用いられる。

この「徳の高い人」「人格者」というものは、単に清廉であろうと自分の身を律したり、自己の理想やあるべき姿を追求することだけによって与えられる呼び名ではないようである。

本文では、盗みに入られた于令儀なる人物が、盗みに入った男の心配までしている姿が描かれている。そしてそういった態度や行為が盗みを働いた男に影響を及ぼしているのだ。

この、自己だけにとどまらず、他者にまで思いをはせる態度こそが、「徳のある人」と呼ばれるにふさわしい態度だといえるのではないだろうか。

出典 『澠水燕談録』

宋の王闢之の著。「澠水」とは山東省を流れる川の名で、筆者の王闢之は官を去って以降、澠水の近くで生活した。南宋の紹興年間以前のさまざまな雑事が十巻にまとめられている。